

言葉・アイデンティティ・他者

——赤染晶子「乙女の密告」論——

〇、はじめに

「乙女の密告」は、二〇一〇〔平成二二〕年六月、『新潮』に掲載、第一四三回芥川賞を受賞したテクストである。選考委員の中で黒井千次・村上龍・池澤夏樹・石原慎太郎・宮本輝は主として否定的な見解を述べており、対して小川洋子・川上弘美・山田詠美・高橋のぶ子が技巧的、構造的な面白さを指摘していることは、この作家や作品評価をめぐるジェンダー・バイアスが想定されるが、彼らの批判とは女子大生とアンネを比喻として設定したことや結末に対しての違和感である。以下の宮本輝のものが象徴的である。

ついに収容所で死んだ十四歳のアンネの居場所を密告したのが、ほかならぬアンネ自身であったという小説には、私はその造りが正しいか正しくないかの次元とは別の強い抵抗を感じて授賞に賛同しなかった。

疋田雅昭

こうした観点は、黒井千次の「人種差別は絶対的な悪だが、悲しいことに誰もが密告者になり得るといふ真実は、もつと緻密に、そして抑制して書かなければいけないと思う」などという意見と響き合うものであるが、恐らくこうした比喩の理解や結末の読解は「誤読」とは言わないものの、何かしらの重要な理解を欠いていると言わざるを得ない。

本論では、女子大生とアンネ・フランクを接続するため、「記号」をめぐる諸概念を媒介に、精神分析的な比喩を巧みに利用したテクストとして、「乙女の密告」を読み直してみる。そして、テクストの射程を明確にした上で、選評で指摘されている「技巧」や「構造」という面の詳細な検討を通じて、物語を再び議論の遡上に乗せてみようと思う。

一、記号的世界の住人たち

教授はまた黒板に向かう。乙女達はまた。ページをめくり始

める。ここは京都の外国語大学である。学生は圧倒的に女子が多い。外国語大学の乙女達は女子大の乙女達とは違う。授業中の内職に化粧をしたり携帯電話をいじったりしない。そんな暇はない。他の授業の予習をする。外国語大学は語学の授業がとても多い。語学の授業は予習が命である。乙女達は常に辞書を引いている。見知らぬ言葉の意味を探しているのだ。

他の多くの小説がそうであるように、このさりげない冒頭にも必要な設定が凝縮されている。外国語大学の学生を「乙女」と呼ぶ語り手は、終始物語の外部に居る。そして、「みか子」を視点人物として内的焦点化し、他の人物を「みか子」越しの視点で語る。この設定は、テキストのキーワードの一つである「真実」をめぐる語りを構築する上で有効かつ重要なものである。

物語の舞台となる京都は、実質的な首都機能は移動しながらも、「東京」という地名がそれを明確に語っているように、象徴的（記号的）なそれは、現在に至るまで失われてはいない土地である。この点において、テキスト内テキストとして重要となるアンネの隠れ家があったアムステルダムも、オランダの首都でありながら、その政府、中央官庁、王室、国会などの首都機能のほとんどが実質的な首都とみなされている別の都市ハーグにある。記号をめぐる物語を語る舞台として、この両都市は恰好の舞台かもしれない。

何気なく開けた冷蔵庫の中が京都の家のなかでは一番明るい

だ。木目の黒くなった床の上を冷蔵庫の光が照らし出している。みか子は冷蔵庫の扉をしばらく開けている。この明るさで暗い世界を照らし出せたらいいのと思う。ぱたん、と冷蔵庫のドアが勝手に閉まったのが無情に思えた。家の中が真っ暗になった。みか子は電氣をつける。電氣をつけても、冷蔵庫の中が一番明るい。それが京都の家だ。世界は暗い。あまりに暗い。みか子は膝を抱える。（傍線部は引用者、以下同様）

物語では、京都特有の入り口が狭く奥行きのある構造の住宅を、オランダ特有の建築方式である建物の後ろの部分に重ねたメタファーとして、アンネ・フランクらの隠れ家を効果的に暗示させている。そもそも『アンネの日記』の原題は『ヘト アハテルハイス』（直訳で「後ろの家」）である。

家の中は暗い。京都の家は人が隠れるのにちょうどいい。人の気配を消してくれる。今日はこの暗さが怖い。ここは「ヘト アハテルハイス」みたいだ。遠くで豆腐屋のラッパが聞こえる。怖い、とみか子は思う。豆腐屋が来る。ラッパを鳴らす。各家の女たちが出てくるのを待つ。みか子は格子の間から見ていた。（中略）ラッパを鳴らして遠ざかっていく。みか子は安堵する。わたしは見つからなかった。いつのまにか外はすっかり黄昏時だ。家の中が暗いはずだ。みか子は冷蔵庫の扉を開ける。光がほしかった。この暗い現実を照らし出す光がほしかった。

芥川選評にあるように、こうしたアンネの心情を追体験するかの様なみか子を描くこの場面は、確かにパロディの様相すら帯びる。しかしながら、隠れ家のメタファーとして描かれた京都の家の暗さは、「豆腐屋」や「冷蔵庫」などといった伏線とともに、両者の設定上の対応関係をより一層明確にしているとも言える。

在学中の学生たちは終始「乙女」と呼ばれる。冒頭ではこの「乙女」の記号性がしつかりと書き込まれている。「乙女」とは、「圧倒的に女子が多い」という事実から来る男子学生を排除した画一化の帰結であり、その意味内容は、他の「女子大の乙女」との比較によってのみ成り立っている。しかし、この物語世界における「乙女」とは、単なる、バツハマン教授の学生たちへの呼称ではない。

こうした記号的な呼称は、当然ながらその意味内容とは恣意的な繋がりしか有していないにもかかわらず、当の本人たちを終始呪縛し続ける。それは、学生たち自身が「乙女」という記号を内面化しているからだ。本来一方的に与えられた呼称であり、学生たち自身にさえ「乙女」が何であるかわからないにもかかわらず、自らを「乙女」であると思いつく学生たちによつて物語世界は支えられている。

逆に言えば、この物語は「乙女」が「乙女」であることの意味を探求する物語であるとも言えるが、それは本来他との差異でしか生じ得ない記号の意味を、絶対的な意味で掴み取ろうとする徒勞の物語であるとも言える。だが、物語の内部においては、「乙女」たちが必ずしも「見知らぬ言葉の意味を探」すことに挫折し

ているとは読みがたい。たとえ全ての記号の意味内容の探求が原理的に不可能であったとしても、我々は現実としてそれを各自の方法で補完し続ける存在である。あえて物語世界に参入せず常に外部に居続ける語り手とともに、読者である我々は自らを、記号の可能性と不可能性の狭間におくことでしか、この物語を「読む」可能性は見えてこないだろう。

自分の授業に突然「乱入」して来るバツハマン教授を訝しく思う他の教授をテキストは、わざわざ「日本人の教授」と語る。日本（京都）の大学における外国人の教授はそれだけでも内部の他者としての位置を余儀なくされてしまうが、その奇行ぶりは、その他者感覚をより強固なものとしてゆく。そして、その厳しい指導と奇行ぶりは、学生からのみではなく、国籍（人種）からも、そして同僚の教員からも、何重にも内部の他者としてバツハマン教授を疎外してゆくのである。

バツハマン教授は右手に鞆を持ち、左手に西洋人形を抱いている。大きな青い目と金髪の巻き毛が美しい。名前はアンゲリカという。これこそがバツハマン教授がすべての人から恐れられ、薄気味悪がられている理由だった。

バツハマン教授の奇行の最たるものは、このピュグマリオリズム（人形愛好）である。これが、教授の厳しさ以上に、教授を「乙女」たちから絶対的他者として成り立たせ、両者に埋めようのない距離を産み出している。にもかかわらず、バツハマン教授のゼミは、使用されるテキストによって、「乙女」たちを魅了してや

まない。また、人形を人として、記号を真実として「あえて」信じようとすると態度において、教授と乙女は共通した心性を有している。

視点人物は、みか子という「乙女」である。バツハマン教授に『ヘト アハテルハイス』の中で一番重要な日を問われて、アンネがペーターとキスをした日と答えるみか子は、教授が考える典型的な「乙女」である。それは、アンネに強い「少女幻想」を抱く学生たちであり、その「幻想」に関して教授は「ちゃんと思いつい」という言葉で再三注意を喚起しているが、「乙女」達には幻想を超えた先へと続く想像力が欠如している。いやむしろ、「乙女」とは幻想を超えることを拒絶する存在として描かれている。

スピーチ・ゼミの乙女達は外大の中でも乙女の精鋭部隊である。語学力に関係なく、二年生から四年生までの喋りに自信のある乙女が大集合する。乙女というものはとにかく口が達者な生き物だ。貴代がいなかったら、みか子はこのゼミについて行けなかっただろう。みか子は誰よりもアンネを愛している。その気持ちにおいて、みか子という人は乙女である。

ここで「乙女」には二つの規定があることに気がつかねばならない。一つは「口が達者」という言葉に象徴される「話す主体」という規定。もう一つが「愛する」主体という規定。この両者において、スピーチ・ゼミの「乙女」達は、「精鋭部隊」というのである。

乙女達には二つの派閥がある。「すみれ組」と「黒ばら組」である。バツハマン教授が分けた。特に意味はない。会合などでもない。乙女というものはちよつとややこしい生き物だ。それをバツハマン教授がさらにややこしくした。みか子は「すみれ組」だ。貴代は「黒ばら組」だ。

そんな「乙女」たちにも内部の他者が存在する。自らを二分する「すみれ組」と「黒ばら組」という意味の無い記号は、意味が無いが故に両者を異質な存在として意味付ける。両者を区分するのが「乙女」の気質なのか、「組」という記号なのか、もはやバツハマン教授にも「乙女」にもわからなくなっているのである。

さらに、「麗子様」「百合子様」と同じ組の中にも、留年している先輩を「様」と名付けることで内部の他者を成立させている。こうした区分けは、互いを記号的存在として成り立たせながら、物語世界を構築している。

二、記号をよむ記号たち

家に帰ると、みか子は早速『ヘト アハテルハイス』を開く。教材で使うドイツ語版にはオランダ語の原題がそのままついている。初めてそのタイトルを見たとき、『ヘト アハテルハイス』という言葉が不思議な呪文みたいに思えた。

このテキストには、言葉という記号が意味を剥奪され浮遊したシニフィアンになる瞬間が再三、描かれる。

みか子はバツハマン教授の言ったことを考えてみる。アンネ・フランクをちゃんと思いつくとは一体どういう意味なのだろう。みか子が思い出せるのは少女の頃に必死で読んだアンネだ。アンネがこのようにユダヤ人について書いていたことはあまり印象に残っていなかった。

最初、みか子にとって『アンネの日記』を読むことは、常に少女の頃の読書と繋がっていた。むしろ、これこそがアンネを「幻想」に閉じこめる元凶であるのだが、同時にそれは「乙女」をアンネに向かわせる理由でもある。

アンネは知っている。国籍を得たとしても、それはあくまで表面上だけのことだ。ユダヤ人は完全にオランダ人になることも、他の国の人間になることもできない。ユダヤ人であるというアイデンティティは決して消えない。ユダヤ人という自己は他の国の国籍と完全に同化することはない。

ユダヤ人というアイデンティティは、少なくとも直接的な意味で国籍ではない。だからこそ当時ユダヤ人という自己規定は、どの国の国籍にも同化出来ない所以にもなった。にもかかわらず、近代の国民国家の時代において、どの国民でもないという選択肢は存在しない。しかしながらこうしたアイデンティティ・クライシスを強く自覚するアンネ像は、「乙女」たちには異質である。

みか子の覚えていたアンネは可憐な少女である。ロマンチックな悲劇のヒロインである。みか子は戸惑いながら、すべてを暗記する。みか子は一通り暗唱してみる。なんとかできた。アンネの言葉をすべて言えた。不思議な気持ちだった。

受け入れたい意味を有する言葉は、まさに「記号」としてしか頭に入らない。ここで「暗記」された言葉は、シニフィエを剥奪されたシニフィアンに過ぎない。

みか子は机の下の本にしがみついた。こうして確かに形があるのに、覚えた言葉はみか子の元から今にも離れてしまっている。みか子は緊張のあまり、バツハマン教授と目を合わせてしまった。

みか子の言葉は、意味性を剥奪された浮遊するシニフィアンである。その浮遊は、机の下の本の活字の衣魚としてのみ、その痕跡をとどめる。だからこそ、みか子はスピーチの際にその本と「別れがたい」のであり、当然ながら、その言葉は不用意に記憶の中からすり抜けてゆく。

あ。小さな声を出す。忘れたのだ。次の言葉が出てこない。このことを最も恐れていた。みか子の掌にじつとりと汗が滲む。教室が重い静寂に包まれる。みか子は立ち尽くす。

言葉の間違いや急な欠落といった現象を、フロイトが心理的な

葛藤の影響として論じていることはあまりに有名であるが、このテクストにおいて、それは「記憶喪失」と呼ばれる。この物語は、みか子、貴代、麗子が「記憶喪失」からそれぞれの意味を見出す物語として規定することが出来るのだが、物語の当初は全ての「乙女」ととってそれは恐怖の対象ではない。

時間は静寂の中でどんどん過ぎていく。みか子は苦しい。忘れていたという状態をこんなに苦しいと感じたことはなかった。思い出したい。みか子は強く思う。思い出したい。それはもはや欲求である。

ゆえに忘れるということ。「恐怖」と思い、思い出すという行為のみを「欲求」とみなすみか子は、この時点で忘却の本当の意味を知る由もない。

バツハマン教授はひよこのキッチンタイマーに目を落とす。バツハマン教授はストップウォッチを使わない。ひよこのキッチンタイマーを使う。ゼミの日だけ、奥さんから借りてくる。夫婦喧嘩してまで借りてくる。日曜日には冷蔵庫のドアに張り付けてある。時間が過ぎる。

麗子のストップウォッチとバツハマン教授のキッチンタイマーは対照的なアイテムである。前者は時を積み上げる時計であり、後者は時を削る時計である。

貴代による麗子のスピーチの再現が、同じ箇所と同じ語句を指

し示すことが出来たという後の場面は、「乙女」たちの朗読の速度がストップウォッチにより厳密に管理されていることを示しており、彼女たちの暗記が機械的なものであることを示している。しかしながら、そうした記憶された他者の言葉とは、どんなに正確であっても、あくまでも他者の言葉である。それは朗読者の言葉ではない。朗読者の言葉が単なる記憶の再現であるうちは、それは他者の言葉であり、そこから生まれるものは何もない。

逆に思い出す時間に制限を設ける時計は、そのことよって「忘れた」という事実を構築する。何時までも考え続けてよいのなら、それは永久に「忘れた」ことにはならないだろう。だが、真の問題は「忘れた」という自覚の向こう側にあることに「乙女」たちは、なかなか気がつかない。

思い出そうとする。みか子は『ヘト アハテルハイス』を開く。まだこの本が読めるほど、世界にはわずかな光がある。これから世界はもつと暗くなる。夜へと向かっていく。時はどんどん進んでいくしかないのだ。みか子は本のページを開く。忘れていた言葉を探そうとする。間に合わない。冬の夕方、京都の家の中はそれほど早く暗くなる。結局、みか子は忘れていた言葉を見つけられなかった。

ここで思い出そうとしているのも、シニファンとしての言葉である。暗記すべき箇所はわかっているわけだから、その場所を探す作業は実は容易なはずである。徐々に薄暗くなる部屋の中で光を失う間に、その日の朝に忘れた言葉を思い出せなかったという

この描写は、実は同日の朝の再帰的なメタファーなのである。翌日の早朝練習の様子は、その言葉を「思い出す」という価値が、制限時間があるステージの上といった決められた世界でなければ成り立たない価値観であることを物語る。

席に戻って、本を確認する。忘れていた言葉を探す。見つかる。みか子は安堵しなかった。この作業は思い出すという作業とは違った。これで失ったものを取り戻したわけではなかった。みか子には忘れた時の絶望感がまだ残っていた。みか子は忘れた言葉をじっと見つめる。

『今、わたしが一番望むことは、戦争が終わったらオランダ人になることです！』

それにしても、なぜ、みか子が思い出せない言葉は、これなのだろうか。

三、誘惑する外部

物語世界の秩序は、麗子とバツハマン教授の間に「噂」が生じることによって揺らぎ始める。その「噂」は麗子から容易に「乙女」としての資格を奪い、その存在を「乙女」の「他者」としてしまった。

バツハマン教授の研究室からは時々、誰かに話しかける声が聞こえる。あれはきっと乙女に話しかけているのだ。何人も

の乙女がこの声を聞いたことがある。乙女とは潔癖な生き物である。潔癖なのに、この手の噂はいつも乙女達について回る。

話しかける声という「噂」と麗子と教授の「乙女らしからぬこと」というのは論理的には結びつかない。しかしながら、ここで重要なのは、それが教授室のドアの向こう側という「外部」から、それもドイツ語という他者の言葉で語られていることである。

乙女とはとにかく喋る生き物だ。

「えー、信じられへんわー。不潔やわあ」

これが乙女の決まり文句だった。乙女とは、信じられないと驚いて誰よりもそれを深く信じる生き物だ。この信心深さこそが乙女なのだ。乙女達はひそひそと騒ぎ合って、信仰を深めていく。乙女が集まれば噂の話になる。事実、噂は日に日に広がった。

「乙女」たちが厄介なのは、こうした噂のシステムを熟知していながらも、それを主体的に補充してしまうことと自体を「乙女」の性質と自覚していることだ。「信仰」という言葉がそれを雄弁に語っている。ユダヤ人であることは、気の遠くなるような年月にわたって「信仰」をその存在証明として来た。むしろ、そのユダヤ人としての自意識及び他者認識が、アンネを支えながらも彼女を追い詰めていったわけだ。この「乙女」という自意識も同様に機能している。

とうとう、恐るべき事態になってしまった。麗子様が黒ばら組から追放されてしまったのだ。みか子は麗子様のことを心配した。組を追放されるなど、乙女にとって生存に関わることだ。乙女とはトイレさえ群れをなして行く生き物なのだ。

トイレの個室の数と乙女の人数は一致しない。トイレでの需要と供給のバランスは常に崩れている。そんなことは乙女にはちっとも関係ない。トイレは乙女の聖地である。ここでは最も頻繁に噂が囁かれる。トイレでさえ、すみれ組と黒ばら組の縄張り争いがある。安心して噂話をしていると、個室に相手の組の乙女が潜んでいたりする。

ここで「聖地」という言葉が使用されていることも、ユダヤ人を語るテキストとの関連においては看過出来ないだろう。乙女達にとって、この「聖地」は、連帯の象徴としても敵対の象徴の場としても機能しているからだ。

乙女の噂とは恐ろしいものなのだ。何の根拠もなく、一人の乙女を異質な存在に変えてしまう。自分達の集団にとって徹底した他者にしてしまう。その時、真実なんか全く関係ない。何よりも、「乙女らしからぬ」噂ほど、乙女にとって恐ろしいものはない。乙女を乙女ではないと決めつけてしまう。同時に、これほど乙女を魅了する噂もないのだ。

ラカンが、欲望がひたすら継続してゆく構造を、記号的世界（象

徴界^②）の中で、代替の記号を欲望せざるを得ない人間の宿命に求めた。象徴界に空いた穴（対象^③a）は、記号世界の外部より代替の記号を通じて我々を魅了するが、記号は代替に過ぎずその向こう側には、ただ「穴」があるだけである。その「穴」は、内部で安定していた記号世界そのものを崩壊させる原因ともなるが、同時に内部を強く誘惑するという二面性を有している。そして、その前者を覆い隠すために記号は作用し続けている。我々を真に誘惑する記号は、その実、空虚なのである。

麗子が「他者」として追放された後釜に入ったのは貴代であった。だが、この「出世」が貴代の本質的な問題を解決したわけではない。

貴代は恐れている。いつか完全にドイツ語を忘れてしまうのではないか。日本語が自分を侵食してしまうのではないか。自分の母国が自分を磨滅させる場所みたいなのだ。日本には自分が濁っていくみたい気がする。自分が正しい自分ではないなくなりそうなのだ。貴代こそ、本当に記憶喪失の人なのだ。貴代の苦しみは今のみか子の苦しみと同じだった。

これまで、対照的に語られて来たみか子と貴代という両者にも、本質的な共通性が語られる。忘れることを恐れる貴代は、その点でみか子と同じであったのだ。ただ、幼少期に母国語の様に刻まれた言葉が消失してゆく原因が、いま話している日本語にあるとき、日本語からドイツ語を学ぼうとする行為は、ドイツ語を母国語とした感性をますます遠ざけてゆくことだろう。

アンネもオランダ人になろうとした。しかし、もしそれが叶っても、その途端に自分は自分でなくなってしまう。なぜならオランダという国が「自分を磨滅させる場所みたい」だからだ。

みか子も自分が自分でいられなくなりそうだった。みか子はどうしても噂が信じられない。それは乙女にとって致命的なことだった。乙女が乙女でなくなってしまうかもしれない。みか子は乙女でない自分など想像できない。

だが、みか子同様に貴代も問題の本質を「乙女」という記号をめぐる問題にすり替えてしまう。

黒ばら組のリーダーになってから、貴代は乙女としての自覚を強く持つようになった。真実とは乙女にとって禁断の果実だった。それに手を伸ばした途端、乙女は冷静になる。自らの本当の姿を知って恥じ入ることになる。お前は乙女ではない。禁断の果実とはそういうものである。

「乙女」を「乙女」にしているのは、「真実」の排除である。この「真実」を「禁断の果実」と呼ぶことは本質的である。「禁断の果実」とは常に内部を誘惑し続けるものの象徴である。しかしながら、その果実を食することは内部での安定を永遠に破壊してしまうことである。禁断の果実は直接的に現前しているわけではない。常に代替の記号としてしか我々の前に現前しない。乙女とは夢見る存在なのだ。

乙女の言葉は決して真実を語らない。乙女は美しいメタファを愛する。例えば、乙女は言うのだ。アンネ・フランクとは一本のバラである。乙女は間違っている。アンネの悲劇をたった一本のバラの身の上に起きた出来事だと思っている。

「乙女」達のアンネへの欲望は、アンネの「真実」とは矛盾する。「乙女」達はアンネ・フランクへの憧れを保持するために「バラ」という記号でそれを代替する。そしてひとたび、「バラ」という記号に魅了されてしまえば、「真実」とは記号を壊すもの、忌避の対象としてしか見なされなくなる。しかし、これは、ある物語内部の特殊事例などではない。

ラカンによれば、性・食・排泄……あらゆる欲望は、記号的にしか我々に現前し得ない。記号があくまでも代替である以上、手に入れた瞬間にそれは記号であることに気づかされざるを得ない。その瞬間、新たな記号が生まれ、我々の欲望はその新しい代替へとすり替わってゆく。にもかかわらず、手に入れるまでの記号は、まるで欲望そのものの様に我々を魅了する。本来、記号は欲望の恣意的な代替であるが、我々は記号にしか直接的に欲望出れない。

一瞬、貴代が黙る。乙女が己を語る時、一体どんな言葉を使うだろう。

「みか子。あたしを誰やと思ってんの」

「え、？」

みか子は顔を上げた。

「Konigin」

貴代は「女王様」という単語を正確に発音した。そうなのだ。貴代は黒バラ組のリーダーなのだ。これが恐るべき瞬間だった。貴代は他者の言葉で己を名乗った。

この時点で貴代は「乙女」であり、「黒バラ組」であり、その「リーダー」であるという記号の積み重ねにより己を発見したのだ。それを、貴代の思い込みに過ぎないと批判することは容易かもしれない。しかし、精神分析的文脈では「わたし」の本身は、限りなく深い空洞である。そこに何重もの記号で蓋をしている行為を愚かであるという位置には、恐らく誰も立ち得ないだろう。

ただ、それをドイツ語という他者の言葉で語る行為において、このテキストは「恐るべき瞬間」と言っているのである。既に母語としてのドイツ語が、もう一方の母語である日本語に浸食されてしまうことから逃れる術を持たない貴代にとって、ドイツ語による自己規定はいつか剥がれ去る頼りない記号に過ぎない。しかし、貴代はこのことには無自覚なのである。

四、崩壊する記号世界

みか子は思わず謝った。これが真実だった。みか子はただ真実の世界の中で立ち尽くす。ドアがはたと勝手に閉じた。みか子は閉じ込められたみたいな錯覚を覚えた。ひやりとした。わたしは今、ドアの向こうにいる。乙女達の誰も踏み込

めなかつた場所にいる。みか子は後ずさりをした。あまりにあほみたいな事態にたじろいでしまった。こんな真実では噂よりも信じるのが難しい。乙女達は決してこの真実を信じてないだろう。みか子は今、自分がいる世界を怖いと思った。ここから出たいと思った。乙女達の噂ばかりの世界に戻りたいと思った。みか子も乙女だった。真実なんか必要なかったのだ。こうなつた以上、みか子はもう二度と噂を信じることはできない。噂を信じなければ、乙女ではいられない。

「真実」はみか子の「乙女」としての世界を崩壊させてしまった。「乙女」の世界は、「真実」の放棄とその代替としての「噂」という記号の構築によって出来ていたのである。だからこそみか子はその事態を「怖い」と思うのである。

みか子は思い知る。そうなのだ。アンネは「ヘト アハテルハイス」に隠れていた。アンネは人に見つかることを最も恐れていた。アンネは決して人に知られてはいけない存在だった。存在を知られたら最後、生きていくことができないのだ。

『アンネの日記』という記号世界は、翻訳であるという以前にそのタイトル自体が既に別の記号による代替であった。そのタイトルは、隠れていることでしか成立しない世界を暗示していた。この「乙女の密告」という物語では、物語内物語である『アンネの日記』と「乙女」たちの境遇が、様々な形でシンクロしている。

『でも、戦争が終わったなら、僕がキリスト教徒なのか、ユダヤ人なのか誰にもわからないだろうとペーターは言います。僕がどういふ名前かということも誰にもわからないだろうとペーターは言うんです。』

このペーターの台詞にアンネは「※」で註を付ける。それはペーターの言ったもう一つの台詞「ユダヤ人はいつだって選ばれた民族だったし、そのことはずっと変わらないだろう」である。どんなペルソナを選択しても、それがペルソナである限りにおいて、常に真実の顔とは和解出来ない。

みか子が常に忘れるアンネの言葉は「今、わたしが一番望むことは、戦争が終わったらオランダ人になることです！」である。ユダヤ人であるアンネのオランダを祖国としたい憧れは、自己否定の上にか成り立たない願望である。オランダ人になることによりその願望を実現させれば、祖国を求めてきたユダヤ人であるアイデンティティは永遠に消滅することになるだろう。バツハマ教授は言う。「ミカコがいつも忘れる言葉はアンネ・フランクを二つに引き裂く言葉」であると。

その「真実」に気づきかけたとき、みか子のもう一つの世界は崩れ始めた。それはみか子を「乙女」の世界から排除させる「噂」であった。アンネはこの日、何かを逃れ得たわけではなかった。隠れ家という世界から自分を引き剥がす噂＝言葉を恐れ続ける生活がこの後も続いたように、みか子は「乙女」という記号世界から噂によって引き剥がされてゆく恐怖に怯えることになる。

みか子はバラを見つめる。アンネは必死でアンネであろうとした。みか子の前に一本のバラが突き付けられる。これはバラである。それだけが真実である。みか子は真実の前でただ立ち尽くす。

バツハマ教授の机の上にもさしてある一輪のバラは「アンネの形見」である。「真実」を知ったみか子にとって、それは最早「バラ」であり「アンネ」ではない。だが、その事実は容易には受け入れがたい。何故ならば、それは「乙女」という世界を壊すことと引き替えであるからだ。

五、連鎖する欲望

一見それぞれが相反し合っているような教授、麗子、みか子、貴代であるが、実は四者はそれぞれの他者の欲望を内面化し、みか子はその媒介として機能している面がある。

「記憶喪失」に対する焦りを全く表情に出さず堂々としていながら、常にその焦りを内包している麗子、貴代、であるが、確かに表面的には反目し合っている。

「明日、早朝から大講義室で自主トレをします」
えー。乙女達は驚く。麗子様の自主トレは大学の名物になっている。麗子様は早朝や放課後に空いている教室の演壇を借りて、スピーチの練習をする。

しかしながら、本質的に自らのドイツ語の復活を夢見る貴代にとって、麗子の早朝練習の呼びかけとは、内なる願望でもあり、口では麗子の存在を否定しつつも、その呼びかけには従わざるを得ない。

みか子は羨ましかった。みか子は未だに同じ所を忘れる。演壇で暗唱するときだけ、忘れてしまうのだ。忘れることが癖になってしまっている。思い出したい。みか子はこれほど強く言葉を求めたことはなかった。みか子も貴代みたいに「ヘト アハテルハイス」の中から言葉がほしかった。みか子は登場人物を探した。己を名乗る言葉を探した。

「こい」「Kouin」という言葉を得た貴代からみか子に轉移された願望は、やはり他者の言葉で己を充足しようとするそれであった。バツハマン教授を愛する麗子は、そのビュグマリオリズムとしての欲望を自らに轉移し、さらにはその欲望は、みか子へと轉移される。

みか子はアンゲリカ人形を強く抱きしめる。みか子は安堵する。やっと、言葉を見つけた。名前を見つけた。わたしはミーブ・ヒースだ。アンネの潜行生活を援助した。これが答えだ。ミーブはアムステルダムでの「ヘト アハテルハイス」の初演を見た時の感想をこう述べている。

ここでみか子は、貴代から轉移された欲望の対象を「ミーブ・ヒース」に見出す。それは、麗子の真実を保証しともにアンゲリカをかくまったことよって見出された。しかし、生き残ったミーブが『アンネの日記』の上演という記号世界を、外部から見つめ直さざるを得ない様に、みか子は自らの現実という物語の外部に立とうとし、そしてアンゲリカ人形誘拐の「密告」を「予言」してしまふ。

みか子は決心した。アンゲリカ人形を明日の朝、麗子様に返そう。これ以上、アンゲリカ人形を守れない。アンゲリカ人形は必ず密告される運命にあるのだ。みか子はアンゲリカ人形を守らなければならない。それがミーブの名前を持つ人の使命だ。真実を記憶する人の務めだ。アンゲリカ人形を守りたいのではなかった。ミーブの名前を持つ自分を守りたかつたのだ。みか子はアンゲリカ人形を鞆に入れた。

みか子は自らが見つけた代替の記号に必死にしがみつくと。そして、ミーブがそうした様に、「真実」を決して「忘れない」様しようとする。だが、みか子は気がついていない。ミーブは他者であり、ミーブはユダヤ人ではない。

「ありがとうございます」
麗子様は一礼をする。つま先から美しく演壇を降りる。ウォーキングも完璧だ。

「あ、思い出した」麗子様は首を傾げている。思い出したの

に、納得していない。

麗子にとって（貴代にとっても）記憶を思い出すことは目的ではない。思い出すべきことは何か別のことなのだ。それには、何かを覚えようとして、そして忘れなければならない。その意味において、忘れることは決して恐ろしくはない。しかし「乙女」であることを証明するために麗子が「出会うのを」待っている「言葉」とは何なのであろうか。そして、貴代も同様にどんな「言葉」を待っているのだろうか。

「無口なアンネ」や。この言葉や」

麗子様は沈黙する。もう何も言わない。ストップウォッチは五分三一秒一二で数字が止まっている。麗子様はストップウォッチを外す。かたん、とマイクの前にストップウォッチを置く。どんなことがあっても、首からストップウォッチを外したことはなかった。

「麗子様、まさか……！」

まるで、山口百恵だ。ラストコンサートで舞台上にマイクを置いて立ち去った。これは昭和の引退儀式のパロディだ。

「そうやよ、みか子」

ここで引退した山口百恵の後を引き継いだ松田聖子は、八〇年代の記号文化の中心的担い手となる。以後のアイドルは、実体性を放棄して、記号的な象徴としてこの後の文化を大きく変容させてゆく。このシーンがそれをも含めたパロディであるとまで言っ

たら穿ち過ぎであるが、麗子はここで「無口なアンネ」という自分の言葉にたどり着く。それは、後にスピーチコンテストに出るという行為の取り消しによって、逆説的に自らの「乙女」を証明することとなった。麗子は他者の言葉（記号）で自らを代替してしまった。そしてそれは、自らの存在証明であったスピーチの世界を放棄することによって逆説的に成し遂げられたのだ。

相変わらず、みか子は噂の渦中にいた。密告者が誰なのかわだにわからなかった。みか子はコンテストに出場するのをやめようと思っていた。そうすれば、麗子様みたいに身の潔白を証明できるかもしれないのだ。理由はそれだけではなかった。コンテストに出るのが怖かった。忘れることが以前よりも怖くなっていた。コンテストが近づくにつれて、みか子の暗唱のパフォーマンスはどんどん良くなった。発音もイントネーションも改善された。人前で暗唱することにもそれほど緊張しなくなった。

ここで、麗子の欲望は再びみか子に転移している。みか子は、麗子と同じようにコンテストに参加しないことによって自らの「乙女」を証明出来ないかと考えるようになった。しかし、皮肉なことに日々パフォーマンスは上がってゆく。まさに、麗子と同じ位置にみか子が立たされているのである。しかし、「真実」を知ったみか子が忘れたくないと思っていることは、既に単なる教科書の言葉、浮遊するシニフィアンではない。

「ここにレイコはいますか」

バツハマン教授は麗子様を探しに来たのだ。みか子は嫌悪感を覚えた。どうして、噂なんか信じたりするのだろう。みか子は真実を記憶している。忘れることにとても怯えている。

ここでもまだみか子は、ミープなのである。「噂」により他者にされ、再び別の「噂」により「乙女」とされた麗子の唯一の「真実」を知るミープなのである。そして、自らをミープとするみか子は、バツハマン教授にもゲシュタポの警察官である「ジルバーバウアー」という名を「転移」しようとするが、当然教授は他者の名前であるそれを強く拒絶する。

「そやけど、麗子様はやつと言葉を見つけたんです。麗子様は名乗らはったんです。それが『無口なアンネ』でした」
バツハマン教授の顔色が変わる。

「なんてことを！ そんなことは絶対に許されません。誰もアンネの名前を騙ってはいけません。アンネの名前はアンネのものです。アンネだけのものです」

アンネが自らの死をもってその言葉を残したことは、逆に言えば、自らの死と言葉の永存が交換条件であったということだ。麗子は「無口」になり自ら乙女の世界を去ることにより逆説的に再び「乙女」となった。それは、少なくとも麗子の本当の意図であったとは言えない。「乙女」とは「話す」存在である。みか子は気がつく。本当の「麗子様は沈黙の人ではなかった」と。

「へト アハテルハイス」は時を超えてアンネに名前を取り戻しました。アンネだけではありません。「へト アハテルハイス」はあの名も無き人たち全てに名前があったことを後世の人たちに思い知らせました。あの人たちは「他者」ではありません。かけがえのない『わたし』だったのです。これが「へト アハテルハイス」の最大の功績です。ミカコは絶対にアンネの名前を忘れません。わたし達は誰もアンネの名前を忘れません

麗子は「乙女」であることを取り戻すために自分の世界を放棄した。しかし、「乙女」であろうが「他者」であろうがそれは一人一人の「名前」が奪われた存在なのであることに、最後まで気がつくことが出来なかった。原理的には「アンネの日記」に書かれていることの全てが、事実ではないとすら言えるにもかかわらず。

そんな中で唯一の「真実」とは、そういった画一的な記号に回収され得ない人々が居たという事実なのではないか。コンテストで暗唱することは、アンネの言葉を通じて「アンネ」という固有性を取り戻すことであり、それは自らを「乙女」という記号性から取り戻すことと同義であるはずだ。

貴代！ みか子は祈る。思い出して！ あなたは乙女だ。「女王様」だ。

「ばばばばーばあー」

貴代が叫ぶ。力いっぱい叫ぶ。今日の貴代はいつもよりも捨て身だ。会場が静まり返る。呆気にとられる。

この場面は、一見これまでの貴代の行為と変わらないようにも見える。しかし、意味も記号も剥奪されたむき出しの記号は、もはや誰の言葉でもない。

バッハマン教授だけが力いっぱい拍手をしていた。

「タカヨー！ タカヨー！ タカヨー！」そう叫びながら、いつまでも拍手をしていた。客席に戻ってきたとき、貴代は眩いた。

「あたし、思い出した……」

貴代は忘れたのではなかった。貴代はもう名前の言えない迷子なんかではなかった。

貴代が思い出したことは何だったのだろうか。少なくともテクストにおけるそれは両義的である。外在的に与えられた「Konigin」という音は、失われることによって、内在的に得てきた何かに再び出会ったのかもしれない。そうであったとしても、貴代は「女王様」という他者の言葉を忘れることで、「乙女」からも、「組長」からも、そしてドイツ語を失ってゆく恐怖からも解放されたのではないだろうか。誰のものでもない記号。そこを埋めるのは、自らの名前、自らの言葉でしかない。

バッハマン教授が言う。

「ゆっくりやってください」

みか子は後ずさりする。ジルバーパウアーのセリフだった。この言葉は隠れ家に踏み込んだジルバーパウアーのせめてもの温情なのだ。

テクストはテクスト内テクストとの間を自由に行き来する。既にアンネの物語なのか、乙女の物語なのか、その境界線は曖昧である。そして、人々は自由な比喻によってその「役割」を負ってゆく。まるで、欲望が浮遊する「夢」の様に。

みか子は耳を澄ます。アンネの声を聞く。アンネは言う。

「今、わたしが一番望むことは、戦争が終わったらオランダ人になることです！」

わたしは他者になりたい。この言葉だった。みか子に必要なのはこの言葉なのだ。みか子はこの言葉に出会わなければならなかった。バッハマン教授は深く頷いてみか子の言葉を聞いた。みか子ははつとする。わたしはジルバーパウアーに真実を語ってしまった。ついに、わたしは自らを名乗ってしまったのだ。ジルバーパウアーに真実を語ったのは誰か。密告者だ。みか子は立ち尽くす。

みか子がここで口にしたのは、アンネの言葉なのか。他者になりたいというみか子の言葉なのか。いずれにせよ、みか子は「真実」を語ることで「乙女」ではなくなった。

ついに、密告者の正体を知った。密告者はわたしだ。密告者に名前はない。わたしに名前なんか無い。真実とは乙女にとつて禁断の果実だった。みか子は一歩前に踏み出す。構わない。必要なのは真実だ。みか子は決意する。わたしは真実を語る。アンネ・フランクの真実を語る。

「わたしは密告します。アンネ・フランクを密告します」

もちろん、戦後アンネはオランダ人になったのかもしれない。だが、そうなっていれば、我々は彼女を知り得なかつただろう。確かに「密告」がアンネの命を奪った。しかし、「密告」が記号の向こう側の「真実」を見出すことであるならば、我々は「密告」によってアンネという名前を知らねばならぬ。「他者」ではなく「アンネリース・マリー・フランク」として。

「密告」という行為による悲劇の物語は、「密告」という記号によってしか「真実」に引き戻せない。記号はいつも両義的である。アンネは「密告」によって「真実」の姿を得た。ユダヤ人としての姿を。そして、日記に自分の名を残した。

「アンネ・M・フランクより」

註

(1) 王宮（ハウステンボス宮殿）はアムステルダムにもあるが、国王は常住していない。

(2) 例えば、「ダニエル・ラガージュの報告『精神分析と人格の構造』についての考察」（佐々木孝次他共訳『エクリ』弘文堂、一九七二年五月）参照。

(3) 象徴界と記号の関係については「能記の優位」（石田浩之『負のラカン』誠信書房、一九九二年二月）に詳しい。

(4) 欲望が代替のシニフィアンの連鎖により形成される点については、例えば「欲望」（福原泰平『ラカン 構造段階』講談社、一九九八年二月）参照。

テクストの引用はすべて『乙女の密告』（新潮社、二〇一〇年七月）に拠り、ルビは適宜省略した。なお、引用に付された傍線はすべて論者によるものである。

（ひきたまさあき 長野県短期大学准教授）